

19世紀ドイツの作曲家 R・シューマン（1810～1856）の作品について、「聴こえない音楽」という言葉がしばしば使われる。そのひとつである「内なる声」innere Stimme は、1839年の作品《フモレスケ》Op.20の中の3段譜中段、一見して主旋律ととれるものを指し、演奏はしないものとされている。彼のピアノ作品で他に3段譜が用いられているのは《3つのロマンス》Op.28であるが、この2作品では特徴が異なり、彼の創作において同じ意味を持つとは言えない。《3つのロマンス》については作曲者自身「クララとの愛の二重唱」だと言及しているが、作曲者の言及がない《フモレスケ》の「内なる声」はどのような意味を持つのか。

先行研究では、「内なる声」はシューマンの創作の核心とまで述べられているにも関わらず、具体的な分析は構造上のものにとどまり、そこに込められた意味には未だ踏み込まれていない。発表者は、この「内なる声」の旋律に教会旋法が使われていることを発見し、それを糸口として、シューマンにおける「内なる声」の意味を明らかにしようと試みた。

「内なる声」は上述したとおり演奏されず、上下二段の反響のような音によって微かに暗示されるのみで、教会旋法の要素はほとんど聴きとることができない。ただし、当該箇所においては、《フモレスケ》全体を支配するテーマすら教会旋法の響きを帯びている。さらに、「内なる声」部分のテーマが同作品中で再現される際には、全ての声部が音価の等しいコラールとなっており、「内なる声」とされていた旋律も聴こえるように書かれているため、教会旋法を用いた旋律も聴きとることができるようになっている。これは、「内なる声」として内在していた教会旋法の外在化とも言える現象である。

シューマンのピアノ作品において、これまでに宗教的なものとして位置付けられてきたものはないと言ってよい。そしてシューマンの宗教性が語られる際には、《フモレスケ》の後に書かれたレクイエムやミサなどの宗教的な作品が引き合いに出されてきた。しかしながら、《フモレスケ》もまた、ピアノ作品における宗教的な作品として位置付けられるべきではないだろうか。機能と声の中に組み込まれた教会旋法的な旋律として「内なる声」を捉えると、そこにはすでにシューマンの宗教性、あるいは宗教的なものに対する態度が現れてくる。

以上のように「内なる声」を通じて《フモレスケ》という作品を捉え直す本知見は、これまでとは異なる観点からシューマンの宗教性を解明する一助となるだろう。